

乳児の身体に象徴的に示される社会関係
コスタリカ先住民ブリブリにおける「シナ」の治療行為から

茅根 美保*

Symbolic Human Relationships Identified through Infants
within Family Groups :

From the Treatment of "Sinà" Found among
the Bribri Indigenous People of Costa Rica

*Miho Chinone

*Ochanomizu University

This paper uses the disease known as "sinà", an indigenous word for a disease that occurs in infants of the indigenous Bribri people that reside in Territorio Indigena *Bribri* de Salitre, Costa Rica, Central America, as a key to examine the symbolic human relationships identified through infants within family groups. It is believed that "sinà", a disease similar to colic, affects infants 1~2 weeks after birth and is characteristic in that in general, it is the grandmother on the mother's side of the family that treats the condition. This paper considers the symptoms and causes of the disease commonly talked about and the relationship between the grandmother and grandchild. It was revealed that "sinà", an abnormal disease that occurs within the body and its treatment indicated the existence of human relationships and other groups within the tribe and that the physical body of the *Bribri* people is something that has developed throughout history.

キーワード

乳児の疝痛 infant's colic

親族組織 kinship system

コスタリカ Costa Rica

ブリブリ Bribri

シナ sinà

I. 本論の目的

中米コスタリカの先住民ブリブリの人々が居住するブリブリ・サリトレ・テリトリー (Territorio Indígena Bribri de Salitre以下サリトレ 図1参照) では、生後1, 2週間の間の乳児が必ずかかると考えられている「シナ (*siná*)」と呼ばれる病気がある。ある女性が「シナは、サリトレの子供のほとんどがかかるから、もしかしたら病気ではないのかもしれない」と語るほど、サリトレでは一般的にみられる症状である。シナに似た症状を大人も呈することがあるが、それは乳児のシナとは異なるとみなされ重要視されない。また、子どものシナは、一般的には母方祖母がその治療を行うことが最適であると強調されることがその特徴である。

文化人類学では、メアリー・ダグラスを初めとして、身体が社会関係を象徴的に示すとともに、その象徴によって、人間関係を確認し、それを周囲に提示することがあることを論じてきた¹。本論文は、身体に生じる異常である「病気」、そしてそれを治す治療行為が人間関係および集団の存在を全体社会に対して誇示する行為となっていること、また身体観が歴史的に構築されたものであることを明らかにすることを目的とする。具体的には、サリトレにおける、シナと呼ばれる乳児がかかると「病気」とその「治療」行為を手がかりとして、身体に象徴的に示される社会関係について考察する。

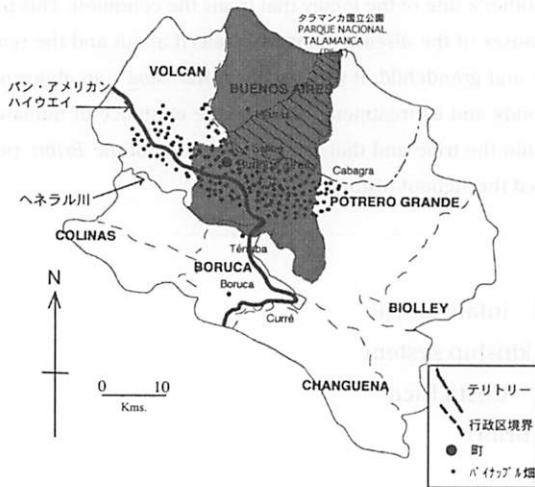


図1 ブエノスアイレス行政区 (灰色部分) とサリトレ (斜線箇所)

II. 調査対象となる人々の社会的背景・医療環境と調査方法

本論文で用いた分析データは、今日、先住民ブリブリ^{注1}と呼ばれる人々のテリトリーの一つであるサリトレにおいて、主に1999年～2004年の間に断続的に行った文化人類学的フィールドワークにより得たものである^{注2}。サリトレは、コスタリカの太平洋側南部ブエノス・アイレス (Buenos Aires) 行政区に属し、ブリブリの起源の地とみなされるカリブ海側の地域から移動した人々が住み着いた場所である考えられているⁱⁱ。サリトレの居住人口は、2000年に行われた国勢調査によれば1,285人ⁱⁱⁱであり、世帯数は筆者の調査では約239世帯 (1999年6月) である。

サリトレでは、母系により形成されるブリブリ語でディッツ (*ditsö*) と呼ばれる親族集団の成員たちが隣接して暮らしている。母系親族集団は、彼らにおいては、ブリブリであるか否かという民族的アイデンティティと深く係わるものであり「母親がブリブリでなければブリブリではない」とも語られ、母系親族の名称が個人の呼称でもあった。しかしながら、今日ブリブリの人々が使用している命名法は、コスタリカ社会が規定する父系と母系双方の名字を使用する双系的命名法である。この命名法では、しばしば母系の名字が省略されたり孫の代においては母系の名字が失われるため、姓名における母系の繋がりを辿ることは難しい。若年層の間では、母系から双系的親族観念への変化も見られる。

医療環境としては、サリトレ内には簡易診療所 (Puesto de Salud) があり、隣接する町ブエノス・アイレスの中心地には社会保険庁 (Caja Costarricense de Seguro Social) のクリニックがある。簡易診療所では、医療助手 (*asistente médico*) とプライマリー・ヘルスケア対応技術補佐員 (*Auxiliares Técnicos de Atención Primaria de Salud*) が働いている。医療助手は、簡単な投薬や注射などを行い、技術補

注1 ブリブリとは、コスタリカ政府によって定められた8つの先住民集団の一つである。ブリブリはしばしば16世紀以来のスペインによる植民地化の圧力に屈することなく19世紀半ばまで独立を保ち続けたと説明される集団であるが、19世紀半ば以前にブリブリと呼ばれる集団は存在しなかった。ブリブリという集団名は、19世紀半ばのコスタリカ政府の国民国家形成期にパナマ (当時コロンビア領) と隣接するカリブ海側のタラマンカ地域が「平定」された時に現れた名称であり、タラマンカ地域の一地名あるいは当時居住していた母系により形成される親族集団の一つの名前であったと考えられている。

注2 筆者は1991年2月～1993年11月までサリトレに青年海外協力隊隊員として暮らし、その後短期フィールドワークを1997年、1999年6月～8月、2001年6月～8月、2002年3～4月、2004年8月、2006年8月に行っている。

佐員はサリトレ内の各地区あるいは家々を訪れ応急的な処置を行ったり予防接種や予防薬などを配布している。また、月に一度の割合で、内科医、小児科医、皮膚科医、薬剤師らが簡易診療所に集団で訪れ診察を行っている。簡易診療所やクリニックで診療を受ける際、常勤の職にある人以外のほとんどの先住民らの健康保険は、「国家支払い (por cuenta del Estado)」であり、公的な医療施設を使用する場合一切支払いの義務はない。

さらに、アワ (awá) と呼ばれる伝統的治療師もいる。サリトレに暮らす人々は、それぞれの状況に応じて上述してきた治療者 (方法) を多元的に選択する状況にある。

Ⅲ. シナと呼ばれる乳児の病気の概要

シナについて、ブリブリの人々の間では、ほとんどの乳児がかかること、またその治療に当たるのは母方祖母が最適であるとしている。本節では、こうしたシナの症状と原因を、彼らが自らをブリブリであるとする根拠としている身体性との関係で捉えていることについて論じる。

人々の語るシナの症状

シナという「病気」については、サリトレに住むエレナ Elena (仮名) というブリブリの女性と同居していた男性ホアン Juan (仮名) が、筆者にシナという病気とブリブリの人々との関係を話した事によって知ることになった。ホアンは、コスタリカの社会においては先住民ブリブリではなく、「白人 (blanco)」と分類される。

知っているか？ここでは、生まれたばかりの子どもが、真っ赤になって力むと、その赤ん坊の母方祖母が赤ん坊を抱かえ、グアルーモ (guarumo 学名: *Cecropia sp.* クワ科) の葉っぱを燃やして、出てきた煙にかざして病気を治すんだそうだ。そしておしっこが出たら治ったという証らしい。(ところで) エレナは、その病気はここの人達だけ (ブリブリだけ) がかかるんだと思ってる。(エレナの話すことは) おかしいだろう？

ホアンによれば、エレナが乳児の病気として語ったその症状は、ブリブリの人々だけではなく「白人」社会にも見られるという。一方、ブリブリであるエレナは、シナの症状を以下のように考えている。

(シナは) 赤ん坊が生まれてからだいたい一週間から十日の間にかかる病気で、スペイン語ではケブランタード (Quebrantado折れてしまった状態)、プホ (pujoしぶり)、コリコ (cólico疝痛) などと呼ばれる病気だ。息は正常なのだけれど、(力む真似をする・筆者注) こんなふうに、何度も力み、顔を真っ赤にする。この子どもたちの全部ではないけれど、ほとんどがかかったことがある。

エレナが以上のように語る乳児の病気はシナと呼ばれ、その一般的な症状としては、力み、力無い泣き声、身体を丸めて手を縮めることなどである。この乳児が力むときに身体を丸め手を縮めるという姿が、プリプリ語でシナと呼ばれる哺乳類ホフマンナマケモノ (学名: *Choloepus hoffmanni*) に似ているためにシナと命名されたのだという。

エレナは、シナを説明するために、疝痛を意味するスペイン語のコリコやしぶりを意味するプホ、ケブランタードなどを挙げている。しかし、彼女によればこれらの病気はシナと呼ばれる病気ではなく、似た症状を呈する別の病気であるという。エレナが言及したケブランタードはケブラント (Quebranto) と呼ばれ、エレナの同居人男性ホアンが「白人」もかかる病気だと言っていたもので、コスタリカでは民俗疾患の一つとみなされている。

簡易診療所の医療助手は、シナの症状はコリコやプホと同様の症状であり簡易診療所に常備している薬や市販薬を飲めば簡単に収まると話す。彼は、サリトレの人々がコリコやプホを治療するために来所したことは覚えている限りではないと言い、一方プエノス・アイレスでは乳児が疝痛やしぶりそして下痢を伴った症状をしばしばプホあるいはプホン (pujón) と呼ぶと述べている。プホンは、プホよりも「大きなプホ」すなわち「ひどいしぶり」を意味する。

以上のように、プリプリ以外の人々がシナの症状を判断すると、プホやコリコとほぼ同じ症状であるという見解を下すこともある。しかし、例えば上述したエレナは、筆者にシナを説明する際、『医者がない場所 *Donde no hay doctor*』(Werner, David) という現代医療に基づいた簡単な治療法を記した医療マニュアルを筆者に渡し、プホとコリコの項を示し病気について説明した。こうしたことから、彼女が現代医療の知識を得ていながらも、シナはコリコやプホとは異なる症状あるいは病気として捉えていることがうかがえる。

人々の語るシナの原因

サリトレに暮らす人々は、シナについて頻繁に語るが、シナの原因についてはほとんど語ることはない。しかしながら、語る際に人々が最も頻繁にあげるのが、先住民ブリブリの人々の身体の特性と女性の生殖機能や生殖現象に係わる「ニャ (ña: 不浄性に係わるものについてのブリブリ語)」である。このことは、治療者が母系集団の代表的役割を果たす母方祖母とされることと深く関係していると思われ、注目される。

ニャとは、具体的には次のような状況の中で生じるとされる。①妊娠中や月経中の女性あるいは流産の経験のある女性が乳児を見る、②前の子供が死んでいて現在は子供が一人しかいないという状況、③妊婦が妊娠期間中に配慮を欠いた行動をとることにより子供が先天的にシナにかかる原因を持って生まれてきている、などである。ブリブリ社会では、妊娠中あるいは月経中の女性は、ニャの状態にあると認識されてきた。スペイン語しか話せない人でもブリブリ語であるニャで不浄性を表現する。コスタリカの文化人類学者マリア・ボッソリ Maria Bozzoli は、「妊娠中の女性やその夫が、へびに噛まれた人を見ると、へびに噛まれた傷口からの出血がひどくなり病状が悪化すると言われる」と報告しており¹²、妊婦やその夫の視線が乳児だけではなく、へびに噛まれた人の身体状況を更に悪化させる力を持つと信じられていたことがうかがえる。そのため、かつては妊娠中や月経中の女性には外出を制限し食器の共用を避けるなどの配慮がなされてきた。

今日、ブリブリの人々の間では、ニャなど不浄性に対する伝統的な観念に対して、批判的であったり関心が薄らいでいるように見られる。年長女性の中には、これらの不浄性に対する配慮のなさが、シナにかかる子供を増加させた指摘する人もいる。このように、伝統的な不浄性の意識が薄れている時に、人々が、シナの原因についてはニャなど伝統的な不浄性の観念を持ち出して説明し、先住民あるいはブリブリの乳児だけがかかると考えていることは、後で述べるように、人々の先住民ブリブリであるという民族的アイデンティティが強くなっている傾向を考えると興味深い。

シナの治療方法と治療者

現代医療では、医薬品が投与される病人と投与する人との社会的関係は基本的に考慮されない。しかし、ブリブリの人々の間では、伝統的治療師アワやアワ以外の人が使用してきた薬用植物 (*kapōli*) は、採取する人や調剤する人、さらには薬用植物を使用して治療を行う治療者と病人の出自上の関係により治療効果が異なるという考え

がある。そこで、本項では、シナの治療者とその具体的な治療法について述べる。

伝統的にブリブリの社会においては、不浄性によって引き起こされた病気の治療は、アワによって行われるのが適切とされ、アワが行う治療とアワ以外の人々が行う治療は明確に区別されてきた。それは、ブリブリ語の「治療」を意味する語の使用にも表れている。ブリブリ語の治療を意味する語彙は、カベジュック (*kpéyök*)、ブアウック (*buauk*)、ウイクック (*wöikök*) の三つである。最後のウイクック (*wöikök*) は、一般の人々の治療行為を示す言葉としては使用できず、アワの行う病気治療のみをさす言葉である。一般の人々が行う治療は一般的に、カベジュック、ブアウックという二つの言葉が使用される。

ところが、シナの治療は、上述した言葉では言い表されず「煙」を意味する「シュカラ (*shakalá/humo*)」と呼ばれる。そして、この「煙」の治療者は、今日サリトレの人々の間では、母方祖母が最適であると語られる。なかには、母方祖母だけではなくアワも治療ができると述べる人や、母方祖母以外の治療者として、自らが属している母系親族集団ディッツの対となる、伝統的には外婚集団である半族ドウワパ (*duwopa*) に属している人 (性別を問わない) を挙げる人もいる。アワがシナの治療ができると言う人達は、自分の所属する母系親族集団にアワがいるなど、アワとは親族関係にある人達であった。すなわち、アワと親族関係にないほとんどの人は、シナにはディッツという母系親族集団が係わると考えている。

シナの治療方法

シナの治療は、地面にかまどなどを作りそこで焚いた火に、ブリブリ語でシナとよばれるホフマンナマケモノの皮と乾いたグアルーモの葉を燃やして、立ち上る煙に乳児の全身を当てる (いぶす) というものである。この時、乳児を抱くのは母方祖母が最も良いと考えられている。さらに、乳児が放尿するまで、あるいは煙が立ち昇らなくなるまで乳児を煙に当てれば治るとされる。なお、シナの治療の際母親はなんら特別な役割を与えられることはない。

この治療で使用される材料から、病気の原因を取り除くには、取り除かれるものと同じもので取り除くという象徴的治療方法であることがわかる。具体的には、シナの原因が全てニャと係わるものではないとされるが、やはりニャに分類されるホフマンナマケモノの皮、そしてニャを追い払う効果を持つ煙を使用していることである。ホフマンナマケモノの皮を用いる理由として、この動物がニャに分類されると共に、シ

ナにかかった乳児がその身体を丸くかがめる姿がこの動物の身体に似ているからだとも説明される。さらに、燃やされるグアルーモの葉は、シナであるホフマンナマケモノが体を丸める姿に似ているといわれており、形態的類似も挙げられる。

IV. 母方祖母 (*wike*) と孫 (*sibáyön*) の関係

サリトレの人々の間では、母方祖母(ウイッケ *wike*) がシナの治療者として最適であると考えられている。本節では、ブリブリの人々の間にみられる母方祖母と孫シバジュン (*sibáyön*) の関係を分析し、母方祖母がシナの治療者に最適であると人々によって捉えられる、その社会的・文化的背景を明らかにする。

母方祖母ウイッケという言葉

ブリブリ語では、母方祖母を父方祖母の親族名称が異なり、母方祖母をウイッケ、父方祖母をウジュック (*uyök*) と呼び分ける。母方祖母を意味するウイッケは、年老いた女性を一般的に言い表すときにも用いる言葉である。しかし、父方祖母ウジュックは父方祖母それ以外の意味を持たない。

母方祖母を意味するウイッケは、ウィ (*wí*) とケ (*ke*) からなる。調査中、筆者は、シナの治療に母方祖母が重要だという話を聞き、「ウイッケの〈ウィ〉は木の基本となる部分、根を意味し〈ケ〉は女性の性器を指す。つまり、ウイッケという言葉は、植物や木の根という生命を生み出す根源あるいは生命の源であることを意味している。だから、母方祖母は、孫の病気を治すことができると考えられたのではないだろうか」と、先走った解釈をインフォーマントに言ってしまったことがあった。結論から述べれば、インフォーマントらは、筆者が述べた字義的な意味を否定した。なぜならばウイッケのウィ (*wí*) のイ (*i*) と根を意味するウィチェ (*wichle*) のイ (*i*) の発音は似ているが異なるものであるからだという。ただ、彼らは筆者のこの解釈に対して、「母方祖母はクランの始まりとなる根と等しく生命の基本となる」と述べている。その際、彼らは、「ブリブリの手は家族(ディッツ)を表している」と語り、親指がブリブリ語では「母方祖母」を表し小指が「娘の子供」すなわち孫となることにも言及した。親指は指の最初であり小指とは指の最後であり最も新しい指なのだと言い、母方祖母が孫の生命と深く関わることを強調する。

ボツソリは、ブリブリの母系親族は植物に例えられ、その根は母方祖母とみなされ、さらに根は大地からもたらされる「シワ (*siwa'*)」を呼吸し、それは頭と等しいと考

えられていると指摘している^v。ここでいうシワは、息や空気と訳されうるもので、身体に生命をもたらすものと考えられてきた。

母方祖母の役割と母系集団

伝統的ブリブリ社会は、「産婆のない社会」^{vi}であり、ひとりで出産をしなければならなかった。そして、母方祖母ウイッケは、出産間際の妊婦に最も近い存在であった。

妊娠中の女性の状態は、ニャと見なされ、他の人に病気や死をもたらす力を持つと考えられてきた事は既に述べた。しかし、一方で妊娠中の女性や出産間近の女性は、他者の行為によって危険な状態におとし入れられる存在でもあった。アメリカの文化人類学者ドリス・ストーン Doris Stone は、出産間近の女性は目が四つになっていると信じられていたため、他の人や動物が出産間近の女性を見るとその女性が死んでしまうと考えられていたことを報告している^{vii}。

出産に一人で臨んだ女性に対して、食事の用意等身の回りの世話ができたのは母方祖母だけであったと語られる。その理由をヘネローサ・トーレス Generosa Torres は、「母方祖母ウイッケは、ニャを避ける力を持っているからだ。ウイッケはアワと同じような力を持っていた」からだと述べる。しかし、ニャの状態にあるとされる出産や妊娠した女性と同様にニャの状態にある人の死体を、母方祖母が触れることはできない。

したがって、これまでの調査から言えることは、母方祖母はニャを避ける力を持つから出産前後の女性の世話ができるのではなく、自らが重要な役割を果たす母系集団に新たな成員（生命）を迎える出産という行為であるからこそ、ニャの状態にある女性への世話が可能であると考えることができる。

以上の事から、母方祖母ウイッケは、その文字の持つ意味や出産への関わりから、直接赤子を生み出す母親よりも新たに生まれる生命により深く関わる存在として認識されてきたことが推測できる。

V. ブリブリの人々が語る「神話 (siwa'¹²³)」に描かれる母方祖母と孫

1960年代から1980年代までブリブリの人々が語る「神話」を分析したボッソリは、孫と母方祖母との関係について「祖母は、肯定的且つ否定的な存在であるが、最も孫

注3 シワ (siwa') は、ブリブリの人々の間では、「歴史」を意味する。

(子ども)と深い関係にあり、その一方で母親は静的且つ受け身的な存在として描かれていると述べている⁸。ポツソリは、具体的な「神話」の語りの箇所を指摘していないが、大地創造神話でいうなら、「大地の子」イリリア iriria の母親とイリリアの母方祖母のシブの誘惑への対応の違いがあげられるだろう。シブは、イリリアを連れ出すためにその母親を新築祝いに招待したり結婚相手を紹介するなど誘惑する⁹。母親は、娘が狙われている事を知りながらも誘いにすぐのってしまいが、母方祖母はなかなかシブの誘いにのらず孫であるイリリアを守ろうとした¹⁰。プリプリの語りを集めた『消滅の道、生き残りの道 *Vías de extinción Vías de supervivencia*』(1992)に掲載された大地創造では、イリリアの母親は、シブの祭りに来れば布やピアス、金の腕輪をあげるというシブの誘惑に負けて祝いに参加したと語られている¹¹。また、筆者がサリトレで収録した大地創世の語りにおいても同様に、母親は男性に弱くだまされやすい存在として、そして母方祖母は常に孫を守る存在として語られる。

プリプリの人々の間で語られてきた、そして今日も語られる「神話」における母親と母方祖母のイリリアを巡る行為の相違は、母親が子を護る以上に母方祖母が孫を保護する立場にあることを神話として描いているといえるだろう。

VI. 伝統的身体観の変貌：母方祖母以外の治療者の登場

シナは、一般的には母方祖母が治療するのが最適であると言われている病気である。しかし、以下に述べるように最近では、数は少ないがそれを積極的に否定する人、あるいは結果としてではあったが、乳児にとって母方祖母と母親は同じ存在であると捉え治療を行おうとした人もいる。

治療師アワを父親に持つプリプリの男性は、母方祖母だけがシナを治せると信じているサリトレの人達に「シナは、母方祖母が治すのではなく植物が治療する」ことを証明するために、自分の娘がシナにかかったときに自分で治療をしたのだと語ったことがあった。彼は、植物、特に薬用植物の使用方法は、先住民が長年の経験の中で得た知識であり「インディオの科学」の一つであると語る。彼は、薬用植物を誰が採取したかでも、治療者が「誰か」でもなく、「薬用植物が病気を治すこと」を証明するために、シナの治療を自ら行ったのだと言う。しかし、彼はその一方で「自分はこの娘の父親だ。母方祖母よりも身近な存在で娘のことは良く知っている」と述べ、病人と自らの親族関係の緊密性に言及している。このことは、母系親族集団という枠組みではない双系的親族観念に基づいた新たな家族意識がうかがえる。

また、ある女性は、自分の母親が「白人」であり、シナは母方祖母が治せるというサリトレの人々の考えを母親が「迷信だ」として信じなかったため、自分で治療をしなければならなかったと述べた。彼女は、「自分の母親と自分は同じ」であるから、問題はないと思い治療を行なおうとしたと言う。しかし、実際にやってみると抱えている赤ん坊は重く、煙は目や喉を刺激し火は熱くじつと赤ん坊を抱えていられず子供を燃やしてしまいそうになったので、夫に赤ん坊を抱えてもらったと述べている。このように、彼女の場合には母方祖母ではなく赤ん坊の母親である彼女が途中まで治療を行い、その後は夫が母方祖母の役割を果たしたのであるが、シナは治ったという。このことに関連して、彼女は、「カソリックでは子供の第一の生命の源は母親、聖母マリアであるから母方祖母の代わりに母親でもよいのだろう」と話した。彼女の言動には、自分の「母親と自分は同じである」という認識と共にカソリックのマリア崇拝の影響が見て取れる。彼女の言う「母親と自分は同じである」という言葉で言い表されたものが、女性であることなのか、ブリブリ社会の言う母系による繋がりにより受け継がれる身体的特徴であるのかその点については確認していないため明らかではない。

以上述べたふたつの事例は、病気、身体、親族関係についてのブリブリの人々の観念に変化が生じていることを示している。

VII. 考察と結語

サリトレに暮らす先住民ブリブリの人々の間において、シナは、乳児期にかけ、母方祖母が最適な治療者とされる病気とみなされる。しかし、ブリブリ以外の人々は、症状からすれば、シナはプロホヤコリコと呼ばれブリブリ以外の人々においても見られる病気であり、乳児だけでなく成人もかかる病気であると考えている。また、診療所において無料で配布される薬で容易に治療できる病気でもある。

それにもかかわらず、なぜブリブリの人々がシナを自分たちだけがかかる病気であると考えているのか。筆者は、その主な理由として次の二つの点を考える。第一は、ブリブリの人々の間にみられる、自分たちの身体は「白人」の身体と同一の身体構造を持つとみなしながらも、その資質においては「白人」とは異なるという認識である。ブリブリの人々のこうした身体認識の背景には、ブリブリの人々と「白人」と呼ばれる人々の食を含む生活習慣や環境の相違、さらにコスタリカの支配社会である「白人」社会のもつ「人種 (raza)」の概念をブリブリの人々が受容したことにあるといえる。そして、ブリブリと「白人」の間に見いだされる身体の差異化は、先住民の存在が長

い間等閑視されてきたコスタリカにおいて、1990年代以降広く見られる先住民アイデンティティの高まりによって再認識され強化されたと考えられる。第二点として、ブリブリの人々の間で、身体の症状だけで病気は同定されるのではなく、その異常を取り除く治療結果によってようやく同定されるとする、彼らの病気観が関わると考えられる。

以上のように、シナはブリブリと呼ばれる先住民の置かれてきたコスタリカ国内における人種的・民族的位置づけや親族構造に深く係わる社会関係そして病気観を反映しているといえる。

病気が、社会的・文化的環境を反映することは、これまでの医療人類学的、社会学的研究において明らかとなってきた。本稿で論じてきたシナという病気を巡るサリトレの人々の語りや実践は、乳児という、本人自身はまだなら社会的関係性を築いていない存在であるが、生まれながらに社会的関係の中にあり、その関係においてその身体は「意味」を構築されていることを示している。さらに、母方祖母以外のシナの治療の治療者が登場し始めていることは、親族関係の変化や治療観の変化を表しているともいえる。しかしながら、一方ではこのような状況が、サリトレにおいてシナという病気を通して身体的経験を共有することを、ブリブリの人々の間に強く認識させる状況を招いているともいえる。

引用文献

- i ダグラス、メアリー：『象徴としての身体』（江河徹他訳）紀伊國屋書店 1983
(Douglas, Mary 1973 *Natural Symbols : Explorations in Cosmology*, Barrie & Rockliff)
- ii Stone, Doris: *Las Tribus Talamancañas de Costa Rica*, Museo Nacional de Costa Rica, San José, 1993 [1961]
- iii Solano, Elizabeth: "La Población indígena en Costa Rica según el Censo 2000," in Rosero-bixby, Luis (eds), *Costa Rica a la luz del Censo del 2000*, (Costa Rica: Centro Centroamericano de Población/Universidad de Costa Rica), 217-258, 2004
- iv Bozzoli, Maria: *El Nacimiento y la muerte entre los Bribris*. Editorial Universidad de Costa Rica. 1982
- v Bozzoli, Maria: *Especialistas en la medicina aborigen bribri*. Universidad

de Costa Rica, San José, 108, 202, 1982

vi Stone, *ibid.*

vii *ibid.*, 58

viii Bozzoli de Will, Maria y Carmen Murillo (edi.): *Tradición Oral Indígena Costarricense*. Vol. 3, año 3, no.1. Vicerrectoría de Acción Social Escuela de Antropología y Sociología, UCR. San José, 163, 1989

ix *ibid.* 14-17, 32-33,

x *ibid.*

xi Palmer, Paula, et. al.: *Vías de extinción, Vías de supervivencia, Testimonios del pueblos indígena de la Reserva KéköLdi, Costa Rica*, EUCR., 1992